

近代日本における受験準備教育機関

—— 研数学館を事例として ——

Preparatory Schools for Entrance Examination in Modern Japan

— A Case Study on Kensu-Gakkan —

吉野 剛 弘

Takehiro YOSHINO

はじめに

上級学校に入学するための入学試験の存在は、近現代の日本の教育において特徴ある存在といえることができよう。もちろんそれは日本独自のものではないにせよ、下級学校の修了資格試験、あるいはそれに類似したものをもって上級学校の入学資格を決める欧米に対して、日本の入学試験はその様相を異にしている。旧制高等学校入試の受験準備においても、準備教育を行う機関、すなわち予備校が存在していた。旧制高等学校入試の準備教育を行った予備校の中には現在もその形を変えずに存続しているものもある¹。しかし、当時の予備校の多くは、現在見られる予備校のように受験準備教育にのみ専心していたわけではないし、その存続期間も短いものが多かった²。

当時、受験準備教育を行う予備校は学校系統の中では各種学校に位置付けられていた。しかし、それは各種学校として正式に設立認可を取った学校に限った話であり、実態としては特別な認可も得ず私塾的形態で教育を行っていた学校も多くあったものと考えられる。ただし、そのような私塾的形態をとるものは、多くの場合その設立者個人に依存するものも多かったと考えられるのであり、存続期間についても短かったものと推測される。受験準備教育の実態を考える際にこの種の機関についても考察の範疇に入れる必要はたしかにあるだろうが、本論文では正式に設立認可を取り、長きにわたって受験準備教育機関として存続した研数学館を事例にとり、戦前期における受験準備教育の実態の一端を明らかにしていく。この種のケーススタディーを進めていくことで戦前期における受験準備教育の全体像の解明につなげることにしたい。

研数学館のように受験準備教育機関として長く存在しつづけたものは、当時の予備校としてはめづらしい。しかしながら、栄枯盛衰の激しかった当時の受験準備教育機関の中で、長い間命脈を保ってきたということは、時代に応じてしかるべき変容をとげながら、それぞれの時代に対応していったということを意味している。それゆえにひとつの機関を追跡していくことで、鳥瞰的な調査とは異なるレベルで当時の受験準備教育の実態に迫ることができると考えられるのであり、本論文の意義もそこに存在するのである。

研数学館というひとつの学校を追跡していくにあたって用いる史料について言及しておく。研数

学館は東京都に設立認可を申請し、各種学校として存続した。そこで、東京都公文書館所蔵の研数学館に関する史料をもとに、研数学館の組織などの変遷を検討していくことにする。ただし、これらの史料ですべてを検討することは不可能である。受験雑誌などの情報をも検討しながらその変遷を検討することにする。そして、研数学館は1989（平成1）年に『資料と写真でみる研数』という冊子を出版している³。戦前期のもの収録はほとんどないが、必要に応じて参照することにする。

1. 組織構成の変遷

(1) 設立当初の研数学館

研数学館が授業を開講するようになったのは、1902（明治35）年のことである。そのときの状況が1914（大正3）年の『全国学校沿革史』では以下のように述べられている。

「本館は明治三十九年一月の設立なるが其の起源は明治三十五年二月十一日紀元節の日を以て開講せるものにて、之れより先神田区表猿楽町に校舎の建築を起工せしを以て開校早々三百余名の入学生とを収容せり、然るに生徒は益々増加し後者の狭隘を告げしを以て三十七年改築せしも尚生徒は益々増加し収容し能はずに至り更に明治三十九年一月廿四日増築落成と共に校則を改め、文部省の許可を得て、別科、初等科、普通科の制度を設く」⁴

しかし、いつ研数学館が始まったのかについては、別の考えもある。『資料と写真でみる研数』には、1897（明治30）年に「数学の大家奥平浪太郎先生により数学専門の私塾を開始。上級学校進学志望者のための予備校として研数学館は認識される」⁵ とある。おそらくは奥平によって何らかの形で数学専門の私塾的なものが1897（明治30）年に開講され、一定規模の校舎を建築した上で授業を開講することになったのが、1902（明治35）年という理解が妥当であろう。ただし、1897（明治30）年あるいは1902（明治35）年の段階で何らかの認可申請をした形跡は現在のところ確認できない。

1906（明治39）年に研数学館は文部大臣から認可されるのだが、以下にその際に示された学則の一部をあげておく⁶。

●目的

第一条 本館ハ専ラ初等数学ヲ教授スルヲ以テ目的トス

●学級及学科程度

第二条 学級ヲ別科初等科及ビ普通科ノ三級トス 但シ別科ハ初等科ニ入ラントスルノ予備ヲナサシメ初等科ハ普通科ニ入ラントスルノ予備ヲナサシム而シテ其学科程度ハ左ノ如シ

●別科

算術 全体

代数学 初メヨリ一次連立方程式ノ終リ迄

平面幾何学 初メヨリ直線形ノ終リ迄

●初等科

算術 全体

代数学 初メヨリ二次連立方程式ノ終リ迄

平面幾何学 初メヨリ面積ノ作図題ノ終リ迄

●普通科

算術 全体練習

代数学 因子分括法ヨリ対数ノ終リ迄

平面幾何学 円ヨリ終リ迄

立体幾何学 全体

平面三角法 全体

●学期修業期間

第三条 毎月初メニ各科共新学期ヲ設ケ別科ハ二ヶ月，初等科及ビ普通科ハ各三ヶ月ニシテ修業セシム

●授業時間

第四条 授業時ハ午前午後夜間トシ別科ハ毎日二時間宛初等科及普通科ハ各毎日三時間宛授業ス

この学則からも分かるように、設立当初の研数学館は決して高等学校や専門学校の入學試験対策を目的としていたわけではない。しかし、第三条の規定で修業期間は別科を除き3ヶ月となっているが、これならば3月に中学校を卒業した生徒が7月の入試までの間に数学を補強すべく通学することも可能である。しかも1日2時間あるいは3時間しか授業は行われないのである。当時は英語や国語を専門とした他の学校も多く存在した⁷。そうであれば、午前中、午後、夜間のいずれかの時間に研数学館に通い、その他の時間に他の学校に通うなり自学自習で受験対策をとることは可能になってくる。つまり、実態としては受験準備教育機関として機能しうる状況にあったのである。事実、先にもその叙述を検討した『全国学校沿革史』では、研数学館は以下のように述べられている。以下の一節は先に引用したすぐ後の部分である。

「即ち別科は特に丁寧にかつ徐々と教授す故に初学者及び中学二、三年級程度の補習或は入學受験準備に適す、初等科は中学三、四年級補習及び入學受験準備に適す、普通科は官立学校入

学受験及中学四，五年級補習に適す，修業年月は各三ヶ月宛九ヶ月を以て卒業す，（一科なれば三ヶ月にて卒業す）大正二年二月廿日神田の大火の際類焼せし為め現在地に新築移転せり，現在生徒数八百余名に達す，職員は館長奥平浪太郎氏外講師二名なり，然し本館の実質は各学校に入学の予備校にして最も正速に教授するを目的とせり。」⁸

先述のように，研数学館は受験準備教育を目的として設置されているわけではないし，研数学館に入学した者すべてが高等学校を初めとする上級学校の入学試験に臨んだわけでもないのだろう。しかし，「本館の実質」は「入学の予備校」というのが外部の認識だったのであり，研数学館は設立間もない段階で受験準備教育を行うものとしてみなされていたということになる。

(2) 大正後期の研数学館と関連校

1920（大正9）年，研数学館と同じ地に研修英語学校が設立された。研数学館と研修英語学校との関係については不明な部分もあるが，所在地が同じ上に設立者ともに片山鬼作となっており，何らかの関係が示唆される。設立当初の研修英語学校の学則の一部を以下にあげておく⁹。

目 的

第一条 本校ハ初等及中等ノ英語ヲ教授スルヲ以テ目的トス

学級学科課程及授業時間数

第二条 学級ヲ分チ左ノ四科トス

初等科

中等科

高等受験及特別講習科

右科ノ学科課程左ノ如シ

級 課目	初 等 科	中 等 科	高等受験科	特別講習科
訳 読	初歩ヨリ中学二年迄	中学三，四年程度	中学五年程度	時宜ニヨリ程度ヲ考 定ス
作 文	右ニ全シ	右ニ全シ	右ニ全シ	
文 法	神田小文典程度	神田中文典程度	神田大文典程度	
会 話	初歩	日用会話	演説聞取 一般会話	
発 音	基礎及一般	読方及一般	読方書取	

右科ノ一週教授時間数左ノ如シ

初 等 科	時間	中 等 科	時間	高等受験科	時間	特別講習科	時間
訳 読	一〇	訳 読	八	訳 読	八	訳 読	六
作 文	四	作 文	五	作 文	六	作 文	四

文法	一	文法	二	文法	一	文法	二
会話	一	会話	一	会話	一		
発音	一	読方	一	書取	一		
練習	一	練習	一	練習	一		

(中略)

第四条 修業期間ハ各科共三ヶ月トシ九ヶ月ヲ以テ全科ヲ卒業セシム、但シ特別講習科ハ二ヶ月若シクハ三ヶ月トス

この学則にある通り、研修英語学校も研数学館と同様に特段受験準備を目的とした学校ではない。学科構成を見れば、高等受験科といった受験をある程度意識したコースが設置されているとはいうものの、これといった受験対策をしているわけでもなく、授業内容としては中学校程度の英語を一通り教授するといったもので、この学校に通うだけで高等学校をはじめとする上級諸学校の入学試験に対応できるわけではない。他の教科の学習は必然的に他の学校や自主学習に頼るしかない。この意味で研修英語学校も研数学館と同じである。しかし、1922（大正11）年に刊行された『一目瞭然 東京遊学学校案内』において、研修英語学校は中学校卒業程度の英語力を身につける学校としても紹介されるが、受験準備専門の学校として研数学館とともに紹介されている¹⁰。このことから、実態としてはやはり研数学館と同じで受験準備教育機関としての役割をはたしていたということができよう。

大正後期の研数学館は、受験準備教育機関としての認識を固めていった。1925（大正14）年の『中学世界』に「東都予備校新評判記」と題された記事があるが、そこで研数学館は「本校は、常に青年学生の悩みの種なる受験の準備的講授なれば、震災後校舎の新築と同時に教員の詮衡をなし、斯界にある名望ある篤学の士を採用し、周到なる準備と必死の努力と相俟って自信ある受験をなさしめ、優秀なる成績を挙げつゝある」¹¹と評されている。このような予備校の紹介記事の中で紹介されているということ自体が、外からみた認識として研数学館は予備校であったということになる。

そして、1926（大正15）年には英語科が設置されていることが『中学世界』の記事上から明らかになる。これにともなう学則変更等の文書は現段階で発見できない。この英語科の設立の時期、そして研修英語学校との関係についてはさらなる調査を要する。ただし、『中学世界』に記事が掲載される数ヶ月後に出版されている『東都学校案内』にも、研数学館は数学と英語の高等受験科、中等科、初等科を持った学校として掲載されていることを考え合わせれば、この時期に英語科は設置されていたのだろう¹²。ところで、その『中学世界』の記事は以下の通りである。

「昨年十月あたりから、新設の英語科は、甲組、特乙組、特丁組と分れてゐるが、それは時間の振りあひで、甲組は十月一日開講十二月廿五日修了、午前九時十五分より十二時まで、特乙組は十月一日開講、十一月末日修了、午後零時十五分より三時まで、特丁組は十月一日より十一月末日まで午後六時十五分より九時まで授業。」¹³

この記事が正しいとすると、英語科は2, 3ヶ月で終了する課程であり、研修英語学校の課程と極めて似通ったものである。研数学館の英語科は研修英語学校を吸収したものである可能性はあるにしても、この英語科は別立ての学校ではなく研数学館の中におかれているということが重要である。つまり、研数学館が数学のみを教授する学校からわずかであるが脱却していくひとつの契機ということができよう。このような数学専科の学校からの脱却は、講習会として理化学部の授業を開講していた事実からも見てとることができる。この理化学部は、1928(昭和3)年の『中学世界』に掲載された「冬休み利用冬季講習会案内」という記事に研数学館の講習会も掲載されたのだが、そこに数学部と英語部に続き理化学部についても案内が存在していることから確認される。その理化学部に関する案内は以下の通りである。

「理化学部—高等受験科の講師は渡邊金次郎氏で、甲組は午前九時十五分から十二時迄乙組は午後零時十五分から三時迄講義がある。会費は三円五十銭。」¹⁴

これは講習会についての案内なので、これに伴う学則変更等は必要なかった可能性もあり、これを立証する文書は管見の限り存在しない。しかし、この講習会が事実であれば、先の英語科の設置と同様研数学館の性質の変化を示すものといえる。

2. 受験準備教育機関としての研数学館の確立

(1) 1932(昭和7)年の学則変更

1932(昭和7)年、研数学館は学則の変更を申請した。この変更では、「今回従来設立セル数学部及英語部以外ニ総合高等受験科、高等数学科及帝大受験科ヲ新設シタルニ因リ学則全体ニ変更ヲ加ヘ、又既設数学部及英語部授業料中一部変更セルハ現下ノ不況ニヨリ生徒数著シク減少セルヲ以テ館ノ経営上増額ノ已ムナキニ至リタルタメ」¹⁵とされている。新設学科については後述することにするが、この段階で数学部と英語部という従来存在した学科はその人員を減らし、授業料の増額もやむなしとしているのである。授業料の増額はさらなる減員を招き、ひいては最終的な減収にもつながりかねないことを考えれば、研数学館の経営の主軸を従来の学科から新設の学科へ移そうという意図を見出すことも可能である。そして、何よりもこの新設学科には一定の需要があるという見通しが働いていたということであろう。昭和の初めにあつては個々の科目の補習、補強ということよりも総合的な受験対策が求められていたということを示唆している。

1932(昭和7)年の改正学則と従来の学則とを対照したものは論文末尾の付録1の通りである。なお、従来の学則は、前章で検討したものと異なっている。ここにある従来の学則がいつ定められたものなのかは定かではないし、前章で検討した当初の学則から上の従来の学則に至るまでの間にどのような学則改正が行われているのかを示す史料は、管見の限り発見されていない¹⁶。先に検討した研修英語学校の設立認可の文書に「曩ニ全館(研数学館・引用者註)学則ヲ私ニ改廃実施セル」¹⁷という記述があることから、学則変更を申請することなしに改革を行っている可能性がある。

また、前章で見たように研数学館は1926（大正15）年に英語科を持ったことになっている。先にみた冬季講習会の案内は高等受験科に関するものみの案内だったが、その後には付される形で「数学部に於ては中等科と初等科があつて」¹⁸とあり、「英語科にあつては中等科、中等予科、及び初等科が設けられてある」¹⁹という記述もあるので、1928（昭和3）年の段階で付録中の「現行学則」の形態になっていた可能性がある。よって、少なくともこの時期に何らかの学則変更が行われている可能性があるが、現段階では推論の域を出ない。

この改正学則にともなう新設学科は、総合高等受験科と高等数学科と帝大受験科の3つである。高等数学科は数学科や英語科と同じ授業時間数であるが、総合高等受験科と帝大受験科はそれぞれ週26時間、週30時間と多くの時間が配当されている。このことは研数学館の教室がそれだけの時間これらの学科のために使われるということにもなるのであり、決して小さな影響ではない。さらに、これらのうち総合高等受験科では国語と漢文、帝大受験科では独逸語と物理学、生物学、化学というそれまでの研数学館では教授されなかった科目が入ってきている。当然のことながらこれらの科目の担当講師は存在しなかったと考えられるのであり、これらの学科の新設のためには新たに人員を雇用する必要さえあったはずである。しかも、この学則改正で設置された学科はすべて1年課程となっている。これらをあわせて考えれば、1932（昭和7）年の学則変更は、研数学館が受験準備教育機関としての性格を確立する大きな契機であったといえよう。

（2）1937（昭和12）年の学則変更と校舎増設

学則変更は、その5年後の1937（昭和12）年にも行われている。このときには定員変更や校舎増設も合わせて申請されている。1937（昭和12）年8月20日に申請した学則変更の理由書には以下のような理由が書かれている²⁰。

学則変更理由書

- 一、今般従来設立セル数学部、英語部、総合高等受験科、高等数学科及帝大受験科以外ニ国漢部、理化学部、簿記速成科及珠算専攻科ヲ新設シ、帝大受験科ノ中ニ英文学科及独立学科ヲ増設シタルニ依リ学則全般ニ互リ変更ヲ加フ
- 二、イ数学部ノ学級中中等予科を加へ五段階ニ分チ、ロ総合高等受験科ノ毎週授業時間二六ヲ三六ニ、ハ帝大受験科中帝大医工学部受験科ヲ医科方面及工科方面ニ分チタルハ一層授業ノ徹底ヲ計リタルタメ
- 三、イ数学部ノ授業料ヲ更メタルハ他ノ部トノ均衡ヲ計ルタメ、ロ総合高等受験科ノ授業料ヲ増額シタルハ授業時間数ヲ増加セルタメ、ハ帝大医工学部受験科ノ授業料ヲ増額シタルハ教師ニ優秀ナル者ヲ数名任用セルヲ以テ俸給総額著シク増加セルタメ

具体的にどのように変化したのかについては後述するが、簿記速成科や珠算専攻科といった本来の数学塾的な学科を増やしつつも、総合高等受験科の時間数増や帝大受験科の学科増設、帝大受験

科への優秀な講師の任用など受験準備教育中心への傾斜をみることができる。以下、具体的な変化を見ていくことにする。

3つの申請のうち、校舎増設はいち早く許可を受け、1937(昭和12)年8月27日には認可されている。校舎増設の理由として「近来弊館へノ入学志願者増加シ殊ニ高等学校並ニ高等専門学校入学志願者ニシテ弊館ニ於テ受験準備教育ヲ受ケントスル者著シク増加シタル上、別途学則変更申請ノ通り国漢部、理化学部、簿記速成科及ビ珠算専攻科ヲ増設致度ニ付今回校舎ヲ拡張、生徒定員ヲ増加シテ之等入学志望者ヲ収容致度ト存候」²¹とある。この理由からも研数学館が受験準備教育を中心とした学校に変化していく様子が見て取れるが、それは教室割にも端的に現れている。表1は校舎増設後の教室使用の割当を示したものである。2部屋を合併して作られる大教室はほとんど総合高等受験科か各科の高等受験科が使用することになっている。

表1 1937(昭和12)年の学則改正後の教室使用配当表

教室別			午 前	午後 A ○時ヨリ三時マデ	午後 B 三時ヨリ六時マデ	夜 間
棟別	階数	教室番号				
本 校 舎	一 階	10				
		11	(数)高等受験科	綜 合 高 等 受 験 科(乙組)	(数)中等予科	
		12				(英)中等予科
	二 階	21	(数)中等科	(英)高等受験科		(数)中等科
		22				(数)初等科
		23	(数)初等科	(英)初等科	(英)初等科	
	三 階	31	綜 合 高 等 受 験 科(甲組)		(国)高等受験科	(数)高等受験科
		32				
		33	(数)中等科	(英)中等科		(英)高等受験科
		34				
	四 階	41	綜 合 高 等 受 験 科(甲組)			(数)高等受験予科
		42				(英)高等受験予科
43		(数)高等受験予科	(英)中等予科		(国)普通科	
44			(英)高等受験予科	(理)高等受験科	(理)普通科	
増 設 校 舎	一 階	15	珠 算 専 攻 科			珠 算 専 攻 科
		16	(帝)英 文 学 科	(帝)独 文 学 科		
	二 階	24				
		25				
		26	簿 記 速 成 科			簿 記 速 成 科
		27	(帝)帝 大 医 工 学 部 受 験 科			高 等 数 学 科

(数) 数学部, (英) 英語部, (国) 国語部, (理) 理化学部, (帝) 帝大受験科

「15 学則変更 研数学館」『私立学校』(321-B6-8, 1938(昭和13)年, 東京都公文書館所蔵)より作成

生徒定員変更の願にも同様の趣旨のことが述べられているが、そこには「最近ニ於テハ生徒定員総数千九百二十名ニ対シ入学志願者数二千五百三十余名ニ達シ尚益々増加スル傾向ニ有之候」²²とある。この書類には変更前の現員数を記したものが付されているが、それは表2の通りである。数学部の中等科が多いように見えるが、英語部と違って中等科は予科がないこと、そして実際に学則

改正により中等予科が設置されることを考えれば、それほど多い数字ではない。それに対して、数学部と英語部の高等受験科は各部の中でもっとも多い人数を収容しているし、総合高等受験科は生徒数が最も多い上に一組あたりの人数も182.7人と最も多い。数学部と英語部の高等受験科、そして総合高等受験科の生徒数は1,142人であり、全体に占める割合は42.6%である。実態として受験準備教育機関として研数学館が機能し、またその拡充が迫られていることを示しているといえる。

表2 1937（昭和12）年学則改正前の在籍生徒数

科 別		組 数	生 徒 数	科 別		組 数	生 徒 数
数 学 部	初 等 科	二	一八五	英 語 部	高 等 受 験 科	二	二八二
	中 等 科	四	三五五	綜 合 高 等 受 験 科		三	五四八
	高 等 科	二	一四二	英 文 学 科		一	八二
	高 等 受 験 科	二	三一二	独 文 学 科		一	六二
英 語 部	初 等 科	二	一八〇	帝 大 医 工 学 部 受 験 科		一	九四
	中 等 予 科	二	一六二				
	中 等 科	二	一四八				
	高 等 受 験 予 科	二	一二八	計			二,六八一

〔15 学則変更研数学館〕『私立学校』（321-B6-8, 1938（昭和13）年, 東京都公文書館所蔵）より作成

そして、定員変更は表3の通りである。増減のあったものについてみていけば、数学部で60名増、英語部で10名減、総合高等受験科で210名増、帝大受験科で80名増である。数学部は増加、英語部は減少となっているが、両者とも高等受験科は100名近く増加しており、それ以下の科ではすべて定員減である。そして、総合高等受験科は午前部の甲組と午後部の乙組の2種類となり、全体で2倍以上の定員になった。この点からも受験準備教育中心の学校に変化していく様子を見て取ることができる。

最後に学則変更についてであるが、1937（昭和12）年の学則のうち学科課程に関するものは文末の付録2の通りである。数学部では中等予科が新設され、高等科が高等予科と名称を変えているが、全体的に大きな変化はない。英語部と高等数学科については変更点そのものがない。変更があったのは総合高等受験科と帝大受験科である。総合高等受験科は授業時間数が大幅に増え、帝大受験科はいわゆる文系学部への受験対策のコースが設置されることになっている。総合高等受験科では漢文を除くすべての教科の時間数が増加しているが、数学と英語の増加は顕著で、その時間数だけを見れば数学部や英語部とほとんど変わりのない時間数にまでふえている。また、中学卒業程度の物理と化学を教授する2ヶ月課程の理化学部の設置にともない、研数学科のみで高等学校高等科の理科の受験に必要な教科はすべて揃うことになる。学科課程という点からみても1932（昭和7）年のころ以上に受験準備教育機関に傾倒していく様子を見ることができる。

（3）戦時下の対応

1941（昭和16）年には、廃校が検討された形跡がある。結果的にそれは却下されているが、その却下の申請の文書は以下の通りである²³。

表3 1937 (昭和12) 年学則改正前と改正後の定員対照表

部 別	現 行 定 員			変 更 定 員			備 考
	科 別	組 数	員 数	科 別	組 数	員 数	
数 学 部	初 等 科	二	一七〇	初 等 科	二	一四〇	数学部ハ 午前組 夜間組
	中 等 科	二	一七〇	中 等 予 科	二	一四〇	
	高 等 科	二	一七〇	中 等 科	二	一四〇	
	高 等 受 験 科	二	一七〇	高 等 受 験 予 科	二	一四〇	
				高 等 受 験 科	二	二七〇	
英 語 部	初 等 科	二	一六〇	初 等 科	二	一三〇	英語部ハ 午前組 夜間組
	中 等 予 科	二	一六〇	中 等 予 科	二	一三〇	
	中 等 科	二	一六〇	中 等 科	二	一三〇	
	高 等 受 験 予 科	二	一六〇	高 等 受 験 予 科	二	一三〇	
	高 等 受 験 科	二	一六〇	高 等 受 験 科	二	二七〇	
綜 合 高 等 受 験 科		一	二〇〇	甲 組	二	二七〇	甲組ハ午前八時ヨリ午後 二時マデ 乙組ハ午後〇時ヨリ同六 時マデ
				乙 組	一	一四〇	
帝大受験科		三	一四〇	帝大医工学部受 験 科	一	一〇〇	午前八時ヨリ午後三時マ デ
				英 文 学 科	一	六〇	午前中
				独 文 学 科	一	六〇	午後一時ヨリ午後四時マ デ
高等数学科		一	一〇〇		一	一〇〇	夜間組
理 化 学 部				普 通 科	一	六六	夜間組
				高 等 受 験 科	一	六六	午後三時ヨリ同六時マデ
国 漢 部				普 通 科	一	七〇	夜間組
				高 等 受 験 科	一	一三八	午後三時ヨリ同六時マデ
簿記速成科					二	一〇〇	午前組夜間組
珠算専攻科					二	八〇	午前組夜間組
計			一九二〇			二八七〇	

〔15 学則変更研数学館〕『私立学校』(321-B6-8, 1938 (昭和13) 年, 東京都公文書館所蔵) より作成

申請書却下願

東京都神田区西神田一丁目三番地

研数学館

設立者 片山鬼作

今般専門学校設立ノ為研数学館ヲ廃校致シ度候ニ就テハ去ル八月十九日附申請ノ書類却下相
成度此段願上候也

昭和十六年九月十三日

右

片山鬼作

東京府知事川西實三殿

文面にある専門学校については翌1942（昭和17）年に研数専門学校として開校されている。廃校を考えた理由についてはこの史料のみで明らかにすることはできない。専門学校の経営に集中したための措置とも考えられるし、徴兵猶予のことを考えれば各種学校ではなく専門学校とした方が生徒募集に有利に働く上に通学する生徒にとっても都合がよいともいえる。もし、後者の理由で廃校を考えているのであれば、戦時下における予備校経営の困難さを象徴する措置といえよう。

おわりに

研数学館というひとつの学校を事例にとり、その歴史を概観してきた。設立当初の明治後期には中等程度の数学を教える機関だったものが、受験対策という役割を背負っていく中で、英語をも教授するようになり、1930年代に入ってから受験準備教育を主とするものへと変化していった。大正期において数学以外に英語も教授するようになるという傾向は、必ずしも研数学館に特有の現象でもない。当時の英語を教授するさまざまな学校が数学を教えるようになったのもちょうどこの頃だからである²⁴。1930年代の受験準備教育への傾斜は、大正後期に私立大学系の予備校が続々と廃校となっていったことを考えれば、既存の受験準備教育機関がそれらを補完する役割を果たすようになったとみることもできよう。しかし、私立大学が設置した予備校は予科を持っていたため普通教育を教授する教員はすでに揃っていたのに対し、研数学館はすべて自前でそれらを揃えていかなくてはならなかったのである。これは受験準備教育機関の歴史上の大きな転換点である。受験準備教育のみを扱う現代的な意味での予備校は、この時期に成立をみたということもできるだろう。

組織変遷の歴史からみれば、昭和初期に現代的な予備校は成立したということは可能でも、その他の側面についても立証が必要である。今回の研究ではもっぱら組織の変遷に焦点を当てた。しかし、人的な側面も非常に重要であることはいまでもない。この頃の予備校では高等学校や専門学校の教員が授業を担当することが多かったが、その点に変化が見られない限り現代的と言い切ることは難しい。人的な側面はどのような状況にあったのかについては稿を改めて検討することにした。また、この研究は研数学館というひとつの学校のケーススタディーにすぎない。他の学校はどのような変遷をとげているのかということの検討も必要である。この点も今後の課題としたい。

【註】

- 1 主なものをあげれば、現在も予備校として続いている駿台予備学校（駿河台高等予備校）や河合塾（河合英学塾）があり、中等教育機関になった正則学園（正則英語学校・正則予備学校）がある。
- 2 当時の予備校の実態については、吉野剛弘「近代日本における予備校の歴史」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第48号（1999）所収、同「明治後期における旧制高等学校受験生と予備校」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第51号（2001）所収、を参照されたい。
- 3 この冊子には「本冊子の主体は、苦難と混乱の第二次世界大戦前後のものとなっておりますが、今後さらに集大成したものの発刊を期したい」（p.1）とあるが、管見の限りこれ以後研数学館の歴史は編まれてはいない。
- 4 長坂金雄『全国学校沿革史』（東都通信社、1914）、p.245
- 5 「研数学館のあゆみ」『資料と写真で見る研数』、p.2
- 6 「2 学校設置 研数学館」（奥平浪太郎）『私立各種学校』（627-B5-22、1906（明治39）年、東京都公文書館所蔵）、頁数不明

- 7 この点については註2の2つの論文を参照されたい。
- 8 長坂金雄『全国学校沿革史』, p.245
- 9 「1 設立 研修英語学校」『私立学校』(303-G1-1, 1920(大正9)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 10 出口競『一目瞭然 東京遊学学校案内』(大明堂書店, 1922), pp.90-95
- 11 「東都予備校新評判記」『中学世界』第28巻第2号(1925.1.10), p.118
- 12 東京市役所編『東都学校案内』(三省堂, 1926), p.343
- 13 駿台三郎「全国予備校総紹介(三) 東京京都編」『中学世界』第30巻第12号(1927.10.1), p.147
- 14 「冬休み利用冬季講習会案内」『中学世界』第31巻第1号(1928.1.1), p.117
- 15 「2 生徒定員, 学則変更 研数学館」『私立学校』(316-F3-20, 1932(昭和7)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 16 東京都公文書館所蔵の学校文書には, この1932(昭和7)年の学則変更に至るまでの間, 学則変更に関する文書は所蔵されていない。
- 17 「1 設立 研修英語学校」『私立学校』(1920(大正9)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 18 「冬休み利用冬季講習会案内」, p.117
- 19 同前
- 20 「16 学則変更 研数学館」『私立学校』(321-B6-8, 1938(昭和13)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 21 「4 校舎増築 研数学館」『私立学校』(320-D6-11, 1937(昭和12)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 22 「15 学則変更 研数学館」『私立学校』(1938(昭和13)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 23 「45 学則変更」(323-F7-14, 1941(昭和16)年, 東京都公文書館所蔵), 頁数不明
- 24 大正後期の英語学校の受験準備教育機関への傾斜については, 前掲「近代日本における予備校の歴史」を参照されたい。

(付記) 東京都公文書館所蔵の文書の題名, 簿冊名および簿冊番号(請求記号)は, 東京都立教育研究所編『東京都教育史資料総覧 第1巻 東京都公文書館所蔵文書目録』(東京都立教育研究所, 1991)の記載に拠った。

(2004年12月2日 受理)

付録1 1932（昭和7）年の改正学則と現行学則対照表

改正学則	現行学則																																			
<p>目的</p> <p>第一条 本館ハ専ラ数学，英語，独逸語，国語，漢文，物理及化学ヲ教授スルヲ以テ目的トス</p> <p>学科及修業年限</p> <p>第二条 本館ニ左ノ学科ヲ置キ修業年限ヲ各一ヶ年トス</p> <ul style="list-style-type: none"> 一 数学部 一 英語部 一 総合高等受験科 一 高等数学科 一 帝大受験科 <p>学科程度及学期</p> <p>第三条 各科ノ学科程度ハ左ノ如シ</p> <ul style="list-style-type: none"> 一 数学部ハ初歩ヨリ中学卒業程度マデトシ初等科，中等科，高等科及高等受験科ノ四段階ニ分チ順次各科ヲ卒ヘテ進級スルモノトス <p>各科ノ期間ハ各三ヶ月トシ高等科ハ特ニ二ヶ月トス</p> <p>各科ノ学科目及毎週授業時間左ノ如シ</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>科別 学科</th> <th>初等科</th> <th>中等科</th> <th>高等科</th> <th>高等 受験科</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>算術</td> <td>四</td> <td>二</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>代数</td> <td>七</td> <td>八</td> <td>七</td> <td>七</td> </tr> <tr> <td>平面幾何</td> <td>七</td> <td>八</td> <td>七</td> <td>七</td> </tr> <tr> <td>立体幾何</td> <td></td> <td></td> <td>二</td> <td>二</td> </tr> <tr> <td>三角法</td> <td></td> <td></td> <td>二</td> <td>二</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>一八</td> <td>一八</td> <td>一八</td> <td>一八</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> 二 英語部ハ初歩ヨリ中学卒業程度マデトシ初等科，中等予科，中等科，高等予科及高 	科別 学科	初等科	中等科	高等科	高等 受験科	算術	四	二			代数	七	八	七	七	平面幾何	七	八	七	七	立体幾何			二	二	三角法			二	二	計	一八	一八	一八	一八	<p>第一条 本館ハ専ラ初等数学及ビ初等英語ヲ教授スルヲ以テ目的トス</p> <p>第二条 数学部タルト英語部タルトヲ問ハズ學級ヲ分チテ初等科，中等科及高等受験科ノ三級トス但シ特別科ヲ開設スルコトアリ初等科ハ中等科ニ入ラントスル者ノ，中等科ハ高等受験科ニ入ラントスル者ノ各予備ヲナサシム其学科程度左ノ如シ</p> <ul style="list-style-type: none"> 一 数学部 <ul style="list-style-type: none"> 初等科 <ul style="list-style-type: none"> 算術 全体 毎日一時間 代数 初ヨリ一元二次方程式迄 毎日一時間 平面幾何 初ヨリ図論初メ迄 毎日一時間 中等科 <ul style="list-style-type: none"> 算術 全体 毎日一時間 代数 初ヨリ比例迄 毎日一時間及二時間隔日交替 平面幾何 初より面積比例迄 毎日一時間及二時間隔日交替
科別 学科	初等科	中等科	高等科	高等 受験科																																
算術	四	二																																		
代数	七	八	七	七																																
平面幾何	七	八	七	七																																
立体幾何			二	二																																
三角法			二	二																																
計	一八	一八	一八	一八																																

等受験科ノ五段階ニ分チ各科ヲ卒ヘテ順次
進級スルモノトス

各科ノ期間ハ各二ヶ月トシ高等受験科ハ特
ニ三ヶ月トス

各科ノ学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

科別 学科	初等科	中 等 予 科	中 等 科	高 等 予 科	高 等 受 験 科
訳 読	一一	一一	一一	一一	一一
和 文 英 訳	五	五	五	五	五
文 法	二	二	二	二	二
計	一八	一八	一八	一八	一八

三 総合高等受験科ハ主トシテ高等学校専門
学校入学受験者ノ準備ニ資スルモノニシテ
中学卒業程度ノ範囲ニ於テ受験主要教科ニ
ツキテ既習知識ノ整理開発ヲナスモノトス
各科ノ学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

(三学期共)

学科目	英 語	数 学	国 語	漢 文	試 験 練 習	計
時間数	一〇	一〇	二	二	二	二六

四 高等数学科ハ主トシテ数学ヲ専攻セント
スルモノノタメニ設ケタルモノニシテ高等
数学全般ニワタリテ教授ス

学科目及毎週時間数左ノ如シ

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
代数学	六	六	六
三角法	六	二	二
解 析 幾何学	六	三	
微 積 分 学		七	七
幾何学			三
計	一八	一八	一八

五 帝大受験科ハ帝国大学受験者ノ準備ニ資

高等受験科

代数学 因数分解ヨリ対数迄

毎日一時間

平面幾何学 直線形ヨリ終マデ

毎日一時間

立体幾何学 全体

隔日一時間

三角法 初ヨリ三角方程式迄

隔日一時間

二 英語部

初等科

訳解, 作文, 書取, 聴取

(右各科共初メヨリ中学二年級初期程度)

中等科

訳解, 作文, 文法, 書取

(右各科共中学二年初期程度ヨリ中学三年終
程度迄)

高等受験科

訳解, 作文, 書取, 聴取

(右各科共中学四年初期程度ヨリ五年卒業程
度迄)

セントスルモノニシテ高等学校卒業程度ト
シ受験学科ニツキテ実力ノ練磨ヲナス
学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

学 期		第一学期	第二学期	第三学期
学 科				
数 学		一〇	八	八
外国語	英 語	八	七	七
	独逸語	八	七	七
物 理 学		二	二	二
生 物 学		二	二	二
化 学			二	二
計		三〇	三〇	三〇

「2 生徒定員, 学則変更 研数学館」『私立学校』(316-F3-20, 1932 (昭和7) 年, 東京都公文書館所蔵) より作成

付録2 1937 (昭和12) 年の改正学則と現行学則対照表

改正学則						現行学則				
<p>目的</p> <p>第一条 本館ハ専ラ数学, 英語, 独逸語, 国語, 漢文, 物理, 化学, 生物, 製図, 簿記及珠算ヲ教授スルヲ以テ目的トス</p> <p>学科及修業年限</p> <p>第二条 本館ニ左ノ学科ヲ置キ修業年限ヲ夫夫下記ノ通りトス</p> <ul style="list-style-type: none"> 一. 数学部 (修業年限 一ケ年) 一. 英語部 (修業年限 一ケ年) 一. 国漢部 (修業年限 四ケ月) 一. 理化学部 (修業年限 四ケ月) 一. 総合高等受験科 (修業年限 一ケ年) 一. 高等数学科 (修業年限 一ケ年) 一. 帝大受験科 (修業年限 一ケ年) 一. 簿記速成科 (修業年限 二ケ月) 一. 珠算専攻科 (修業年限 二ケ月) <p>学科程度及学期</p> <p>第三条 各科ノ学科程度ハ左ノ如シ</p> <ul style="list-style-type: none"> 一. 数学部ハ初歩ヨリ中学卒業程度マデトシ初等科, 中等予科, 中等科, 高等受験予科及高等受験科ノ五段階ニ分チ順次各科ヲ卒ヘテ進級スルモノトス <p>各科ノ期間ハ各二ケ月トシ高等受験科ハ特ニ三ケ月トス</p> <p>各科ノ学科目及毎週授業時間左ノ如シ</p>						<p>目的</p> <p>第一条 本館ハ専ラ数学, 英語, 独逸語, 国語, 漢文, 物理及化学ヲ教授スルヲ以テ目的トス</p> <p>学科及修業年限</p> <p>第二条 本館ニ左ノ学科ヲ置キ修業年限ヲ各一ケ年トス</p> <ul style="list-style-type: none"> 一. 数学部 一. 英語部 一. 総合高等受験科 一. 高等数学科 一. 帝大受験科 <p>学科程度及学期</p> <p>第三条 各科ノ学科程度ハ左ノ如シ</p> <ul style="list-style-type: none"> 一. 数学部ハ初歩ヨリ中学卒業程度マデトシ初等科, 中等科, 高等科及高等受験科ノ四段階ニ分チ順次各科ヲ卒ヘテ進級スルモノトス <p>各科ノ期間ハ各二ケ月トシ高等科ハ特ニ三ケ月トス</p> <p>各科ノ学科目及毎週授業時間左ノ如シ</p>				
科別 学科	初等科	中 等 予 科	中 等 科	高 等 予 科	高 等 受 験 科	科別 学科	初等科	中等科	高等科	高 等 受 験 科
算 術	四					算 術	四	二		
代 数	八	一〇	一〇	八	八	代 数	七	八	七	七
平 面 幾 何	六	八	八	六	六	平 面 幾 何	七	八	七	七
立 体 幾 何				二	二	立 体 幾 何			二	二

三角法				二	二
計	一八	一八	一八	一八	一八

二. 英語部ハ初歩ヨリ中学卒業程度マデトシ
初等科, 中等予科, 中等科, 高等受験予科
及高等受験科ノ五段階ニ分チ各科ヲ卒ヘテ
順次進級スルモノトス

各科ノ期間ハ各二ヶ月トシ高等受験科ハ特
ニ三ヶ月トス

各科ノ学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

科別 学科	初等科	中 等 予 科	中等科	高 等 予 科	高 等 受 験 科
訳 読	一	一	一	一	一
和 文 英 訳	五	五	五	五	五
文 法	二	二	二	二	二
計	一八	一八	一八	一八	一八

但シ書取, 聴取, 会話ハ隨時之ヲ課ス

三. 国漢部ハ中学程度ノ国語, 漢文及作文ヲ
教授シ, 普通科及高等受験科ノ二段階ニ分
チ普通科ヲ卒ヘテ高等受験科ニ進級スルモ
ノトス

各科ノ期間ハ各二ヶ月トス

各科ノ学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

学 期 学 科	普 通 科	高 等 受 験 科
国 語	八	八
漢 文	八	八
国 文 法	一	一
作 文	一	一
計	一八	一八

四. 理化学科ハ中学程度ノ物理及化学ヲ教授
シ, 普通科及高等受験科ノ二段階ニ分チ普
通科ヲ卒ヘテ高等受験科ニ進級スルモノト
ス

各科ノ期間ハ各二ヶ月トス

三角法			二	二
計	一八	一八	一八	一八

二. 英語部ハ初歩ヨリ中学卒業程度マデトシ
初等科, 中等予科, 中等科, 高等予科及高
等受験科ノ五段階ニ分チ各科ヲ卒ヘテ順次
進級スルモノトス

各科ノ期間ハ各二ヶ月トシ高等受験科ハ特
ニ三ヶ月トス

各科ノ学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

科別 学科	初等科	中 等 予 科	中等科	高 等 予 科	高 等 受 験 科
訳 読	一	一	一	一	一
和 文 英 訳	五	五	五	五	五
文 法	二	二	二	二	二
計	一八	一八	一八	一八	一八

但シ書取, 聴取, 会話ハ隨時之ヲ課ス

各科ノ学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

学期 学科	普通科	高等受験科
物理	九	九
化学	九	九
計	一八	一八

五. 総合高等受験科ハ主トシテ高等学校専門学校入学受験者ノ準備ニ資スルモノニシテ中学卒業程度ノ範囲ニ於テ受験主要教科ニツキテ既習知識ノ整理開発ヲナスモノトス
学科目及毎週授業時間左ノ如シ

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
英語	一五	一五	一五
数学	一六	一六	一六
国語	三	三	三
漢文	二	二	二
計	三六	三六	三六

随時物理及化学等ヲ課スコトアルベシ

六. 高等数学科ハ主トシテ数学ヲ専攻セントスルモノノタメニ設ケタルモノニシテ高等数学全般ニワタリテ教授ス
学科目及毎週時間数左ノ如シ

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
代数学	六	六	六
三角法	六	二	二
解析幾何学	六	三	
微積分学		七	七
幾何学			三
計	一八	一八	一八

七. 帝大受験科ハ帝国大学受験者ノ準備ニ資セントスルモノニシテ, 帝大医工学部受験科, 英文学科及独文学科ノニ分チ各高等学校卒業程度ニ於テ実力ノ練磨ヲナス

三. 総合高等受験科ハ主トシテ高等学校専門学校入学受験者ノ準備ニ資スルモノニシテ中学卒業程度ノ範囲ニ於テ受験主要教科ニツキテ既習知識ノ整理開発ヲナスモノトス
学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

(三学期共)

学科目	英語	数学	国語	漢文	試験練習	計
時間数	一〇	一〇	二	二	二	二六

四. 高等数学科ハ主トシテ数学ヲ専攻セントスルモノノタメニ設ケタルモノニシテ高等数学全般ニワタリテ教授ス
学科目及毎週時間数左ノ如シ

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
代数学	六	六	六
三角法	六	二	二
解析幾何学	六	三	
微積分学		七	七
幾何学			三
計	一八	一八	一八

五. 帝大受験科ハ帝国大学受験者ノ準備ニ資セントスルモノニシテ高等学校卒業程度トシ受験学科ニツキテ実力ノ練磨ヲナス
学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

イ、帝大医工学部受験科ハ帝国大学医学部
並ニ官立医科大学及工業大学受験者ノ
為ニ設ク

学科目及毎週授業時間数左ノ如シ

第一 医科方面

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
数 学	一二	一二	一二
物 理	四	四	四
化 学	六	六	六
生 物	二	四	二
外国語	六	六	六
計	三〇	三二	三〇

第二 工科方面

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
数 学	一二	一四	一二
物 理	六	六	六
化 学	六	六	六
製 図	二	二	二
外国語	四	四	四
計	三〇	三二	三〇

ロ、英文学科ハ帝国大学法学部及経済学部
受験者ノ為ニ設ケ英語ヲ授業ス

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
英文和訳	一八	一八	一八
和文英訳	二	二	二
計	二〇	二〇	二〇

ハ、独文学科ハ帝国大学法学部及経済学部
受験者ノ為ニ設ケ独逸語ヲ授業ス

学期 学科	第一学期	第二学期	第三学期
独文和訳	一八	一八	一八
和文独訳	二	二	二
計	二〇	二〇	二〇

学 期 学 科	第一学期	第二学期	第三学期
数 学	一〇	八	八
外国語	英 語	八	七
	独逸語	八	七
物 理 学	二	二	二
生 物 学	二	二	二
化 学	二	二	二
計	三〇	三〇	三〇

「16 学則変更 研数学館」『私立学校』（321-B6-8, 1938（昭和13）年，東京都公文書館所蔵）より作成